

## I-D-47

最近24年間(1958-81年)の肺癌  
剖検例——肺癌548例の臨床病理学的解析——

浜松医科大学病理学教室

○森田豊彦

東京大学医学部病理学教室

山口和克、島峰徹郎

目的：日本病理剖検輯報に登録の始まつた1958年(昭和33年)からの東大医学部病理学教室の肺癌剖検例については17年間の時点で本学会に報告(肺癌15(3):261、1975)したが、その後も社会環境の変化、肺癌の増加及び診療の進歩などと共に興味ある変化が見られており、四半世紀に近い肺癌剖検例をまとめ、今後の予測にも資したい。

方法：1958年から24年間の同教室の肺癌剖検例、男性409例、女性139例につき、剖検記録、組織標本及び臨床病歴から、年齢、性、臨床経過、治療、喫煙歴、組織像などを検討し、5年区分あるいは10年区分をし、他腫瘍とも合わせその推移を見た。

結果：1. 全体の傾向 肺癌の男女比は、先の10年2.9、次の10年は3.3、全体2.9で、5年区分男女別剖検例中の頻度は、男性は5-8%へ、女性は3-7%へと漸増しており、悪性腫瘍剖検例中では男性は12%、女性は8%で、最近4年間で女性は10%を超えた。

2. 他腫瘍との関係 最も頻度の高い悪性腫瘍は、男性は順に胃癌、白血病、肺癌、肝癌、悪性リンパ腫で、先の20年は胃癌が1位で、最近4年間は肝癌が1位、2位は肺癌と変つた。女性は順に胃癌、白血病、肺癌、胆嚢・胆管癌、子宮頸癌で、先の15年は胃癌が1位、次の9年は白血病が1位で、この期間中女性では肺癌は胃癌より数が少なかった。

3. 組織型の推移 組織型分布は男性腺癌44、扁平癌27、小細胞癌14、大細胞癌11、他4%で、扁平癌と小細胞癌は増加、大細胞癌は減少し、女性は腺癌65、扁平癌15、小細胞癌10、大細胞癌7、他4%で、大細胞癌が減少の他は大きい変化はなかった。

4. 組織型と年齢分布 男性全体のピークは60歳代で、扁平癌は60代から70代へ明瞭に、他も大細胞癌を除き高年移動があつた。女性では全体のピークが60代から70代へ、扁平癌と小細胞癌は高年移動が明瞭で、腺癌のみでは若年移動が見られた。

5. 年齢分布別男女比 全体として30代から漸増し、60代をピークとして漸減する傾向があり、ピークの値は小細胞癌11、扁平癌9が高く、大細胞癌5、腺癌3で、合計は4であつた。

6. 喫煙 肺癌例全体の喫煙率は男性87、女性41%で、小細胞癌を除き、男性に有意に高く、同性間では女性の小細胞癌は腺癌に比し有意に高い。20本以上中等度以上喫煙者は合計、扁平癌、腺癌で男性に有意に多く、同性間では男性小細胞癌は腺癌に比し有意に多い。40本以上の高度喫煙者は合計と腺癌で男性に有意に多く、同性間では男性扁平癌は腺癌に比し有意に多かつた。

## I-D-48

非手術肺癌の臓器転移

秋田大 放射線科 加藤敏郎

非手術肺癌症例の臓器転移の実体を、特にchronologicalに検討した。

昭和51年9月-昭和56年12月に当科を受診した非手術肺癌患者は、男51、女12の計63例で、組織型は扁平上皮癌30、小細胞癌10、腺癌11、大細胞癌5、腺扁平上皮癌1例で、他に分類不能や細胞診陰性などを合わせた6例であった。病期はI期5(8%)、II期10(15.9%)、III期25(39.7%)、IV期23(36.5%)である。原発巣に対する主たる治療法は照射であるが、5,000rad以上41例、5,000-2,000rad 11例、2,000rad以下6例で、化学療法は5例であった。

転移臓器としては、骨、腹部(肝、脾、腎及び肝門部リンパ節)、肺及び脳を対象としたが、縦隔以遠のリンパ節(主に鎖骨上窩、頸部及び腋窩)も対照的に取り上げた。これら転移は何れもそれらに対応した症状を呈し、X線写真、シンチグラム、CT、症例によっては試験切除又は開腹によって確認された。剖検によって初めて発見されたものは含まない。

転移は63例中37例、58.7%に認めた。同一例で複数臓器に転移を有したものもあり、延べ数では58となる。頻度の高い順にあげると、リンパ節19例(30.2%)、骨14例(22.2%)、腹部10例(15.8%)、肺8例(12.7%)、脳7例(11.1%)である。組織型別に臓器転移の特長を眺めると、扁平上皮癌ではリンパ節転移(23.3%)が最も多く、小細胞癌ではリンパ節及び腹部(夫々40%)が最も多いが、骨(30%)、肺及び脳(夫々20%)とあらゆる部位へ転移が他組織型に比して高率である。腺癌では骨(36.3%)、リンパ節(27.3%)及び脳(18.2%)が主であった。

症状初発又はX線写真で異常陰影を指摘された時点を発病時期として診断確定(又は治療開始)までの期間、即ち病恹期間(Anamesendauer)は症例によって長短区々であるが、平均4.5月であった。この期間を含めて全症例の平均観察期間は約12月である。転移確認の時期は、発病時を起点として算出すると、リンパ節5.0月、骨6.9月、肺8.1月、脳10.0月及び腹部10.6月の順であった。即ち、初診時すでにIV期であった例も含めて、治療及びその後の経過中に次々と転移が発現し、そのため死亡する結果となった。

上述とは別に、術前、術後照射を施行した19例の手術群では約20月の観察で9例(47.4%)に転移を認めたが、その発現時期は可成り遅い。この群の病恹期間は4.1月で非手術群と大差なかった。従って転移発現期間の差は、病期及び原発巣治療法の差のみでなく、腫瘍固有の悪性度といったものが関与していることも考えられる。一方、強力な化学、免疫療法の併用が予後改善にどれ丈寄与するかは今後の問題である。